

II-1-6 英語科

(1) 研究仮説

ア 研究の背景

本校英語科では「英語で、情報や考えを的確に理解したり、適切に表現したりする資質・能力の育成」を教育目的としている。理解や表現の下支えとなる文法について主に学習するのが、英語表現Ⅰである。文法を理解するだけでなく、生徒自らがそれを運用し、表現する場面を増やすことで、実践的な英語力の育成を目指して授業を行っている。しかしながら、英語表現Ⅰは『予習→答え合わせ→解説』というようなオーソドックスな授業展開となることが多い。この改善を行うべく、以下の研究仮説を設定した。

イ 研究仮説

「学習者中心」の授業を行うことで、知識をより定着させるとともに、英語への深い洞察と新たな疑問を見出させることができるであろう。また、２段階での協同学習の場を設定することで、レディネスを促進し、生徒が意欲的に授業に取り組めるようになるであろう。

(2) 実践

ア 実施日時：通年

イ 実施場所：各教室

ウ 参加生徒：１年Ａ・Ｆ組生徒 計 80 名

エ 実施内容（１コマ 55 分の授業の流れ）

０．生徒は、教科書の演習問題の予習を行う。

１．担当する大問の決定（１分）：

４人グループを作り（ホーム・グループ）、解説を担当する大問を決める。所定のカードを用いて、毎回ランダムで選定される。そのため、生徒は全大問の予習が必要となる。

２．エキスパート活動（５分）：

大問の解答は教室外周の黒板・壁面・窓に貼られているため、その場所に移動する。そこで他の班から来た同じ大問を担当する生徒（エキスパート・グループ）と解答を確認し、エキスパート・タスクに取り組む。自分が行ってきた予習の内容と解答に相違があれば、エキスパート同士で協議し、解決する。エキスパート・タスクはレッスンによって内容は様々で、生徒が誤解しやすいところ・理解にくい箇所などを事前に予想して設定しておく。

３．ホーム活動（各大問 3～5 分）：

エキスパート活動後、ホーム・グループに戻り、大問 1 から担当の生徒が他の生徒に向けて答え合わせと解説を行う。その際に留意させる点は以下の２点である。

・解答は、書いたものを見せるのではなく、音読して相手に伝えること。

・エキスパート・タスクでは、一方的に相手に伝えるのではなく、質問等をしながら周囲を巻き込むこと。

また、ホーム・グループで新たに出てきた疑問については、Google Chat を用いて、クラス全体で共有を行うこともある。誰の質問に誰が答えても良い。また根拠とした文法書のページや、参考になりそうなウェブサイトの共有も Google Chat 内で行っている。

４．振り返りタスク（時間があれば 3 分程度）

その授業で学習した内容を使った短文英作文を Google form で配布。生徒は個人もしくはペアで解答する。解答で誤りが多かった箇所については、次回授業で取り上げる。

(3) 評価

ア アンケート結果（抜粋）

授業を行った対象生徒に対して 12 月下旬にアンケートを実施した。アンケートの回答率は 92.5%である（欠席者 6 名）。アンケートで質問した内容は、以下の通りである。

I この授業で、「あって欲しいのに無いものは何か」または「足りないことは何か」と何回くらい考えましたか？[自ら考えた回数、促されて考えた回数、考えが浮かんだった回数]（図 1）

II この授業によって、「あって欲しいのに無いものは何か」または「足りないことは何か」を、

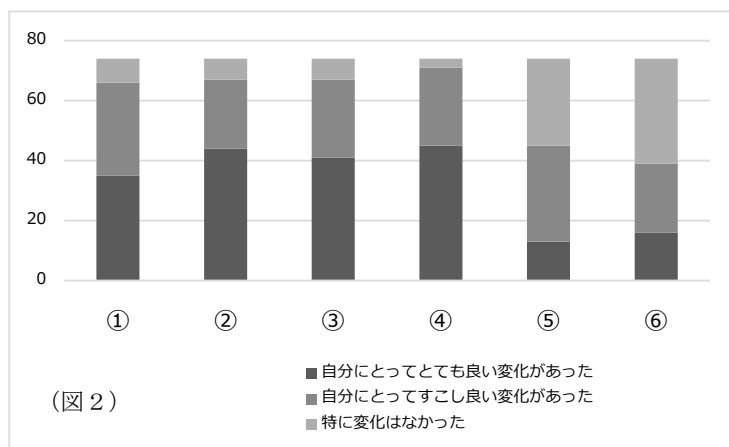
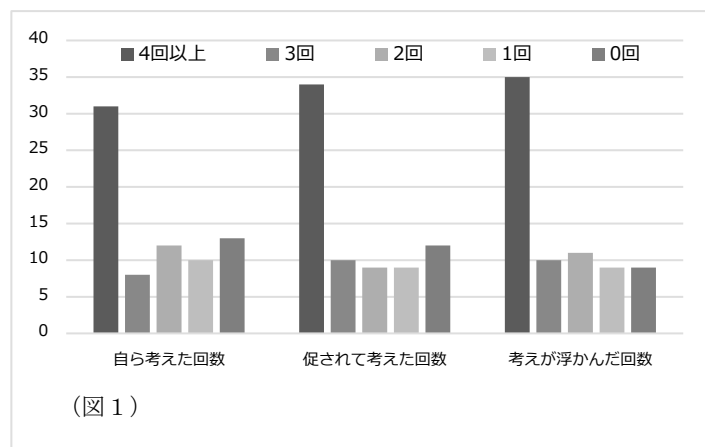
これまでよりも考えるようになりそうですか？

Ⅲ この授業になってから、自分の行動や意識に何か変化はありましたか？（図 2）

- ①予習に取り組む姿勢 ②授業中の集中度 ③「なぜ？どうして？」と思う頻度
④分からなかった問題への反応 ⑤授業後の復習への取り組み
⑥教員へ分からないことを質問する頻度

Ⅳ Ⅲで答えた内容について、具体的な変容を述べてください。（参加生徒の感想）

Ⅴ この授業に関する全体的な感想を自由に記述してください。（参加生徒の感想）



イ 参加生徒の感想（一部抜粋）

- ・グループのみんなに詳しく教えるには、抜け目なく予習する必要があったから、自ずとその習慣が身に付いた。
- ・タスクがあることで予習に更に取り組むことができるようになった。また、自分たちで考えることによってより記憶に残りやすく、授業に集中することもできるようになった。
- ・どうしてこの文法になるんだろう、どうしてこの単語を使うんだろうと、良い意味でいちいちひっかかるようになった（より詳しく知りたいと思うようになった）。
- ・今までは予習など全然しなかったが、家で予習をする時間を絶対に取りようになった。また、考えることもあまりしていなかったが、一つ一つの問題について考えるようになった。
- ・いろんな人の疑問を聞いて自分もわかってないことに気付いたり、芋づる式に不明点が出てきたり、感心することも多く、個人的に好きな授業だった。
- ・みんなが分かるところは飛ばして、分からない箇所を重点的に考えられるので、効率がいい。
- ・グループ活動になってからみんなとの交流も増え、前から英語は苦手という気持ちがあったけど授業中はその気持ちが薄れた。

ウ 考察

アンケート結果から、予習～授業までの過程において生徒に好影響を与える授業であることが分かった。特に、2つ目の仮説で言及したレディネスへの影響は大きかったと言える。英語に苦手意識を持つ生徒にとっては、教員に質問するよりも友人同士で解決できる環境が有益だっただろう。知識の定着に関していうと、授業～復習までの過程が生徒にとって重要になるが、その点への影響はそこまで大きくないことがアンケート結果から見て取れる。

エ 今後の課題

1つ目の仮説で言及した知識の定着度合いを測るためには、考査等の成績の分析が必要になるだろうが、それには至っていない。また、授業～復習への過程へのインパクトを強くするためのアプローチも必要だろう。今後の研究課題としたい。

(4) 参考文献

- ・権瞳 (2017) . 「学習者中心アプローチと教員役割—英語科教員養成課程における課題として—」『阪南論集. 人文自然科学編』53 巻、2 号、pp.41-51.
- ・松林世志子 (2017) . 「日本人英語学習者のモチベーションと英語学習方法に関する質的研究：教職課程を履修している大学生へのインタビューを通して」『言語学習と教育言語学』2016 年度版、pp.71-84.